竹條田仙果綴
梅堂國政画
雪月花三遊新話
大尾
松延堂壽梓
三編下
三編中
三編上

三編上

A482
7

雪月花三遊新話

三編上

仙果綴

國政画

48-8148

雪月花三遊新話三編序

花は盛りに月は隈なきを好むは風流の常情にして初学の徒は僅かに梅柳乃枝葉を弾ずるに眺め終に文に深く窺ふ三教の精粗を編に収て結局ふるゆる国家の風教考ひらく俗情を外にあらず兼好法師も能くいはゆる指掌をべきを予が愚筆十分一も家し繰返し比例ハ世間の名所と雲霧の霧の如く似て実に家と実の遊戯なるも又めかせん焉愧べき外独文の冠を附して序文を換るものハ

十四年一月

伊香保仙窟庵主

篠田仙果

竹ケ崎大尽
粥川圖書
俠客石井山三郎

藝妓小勢

大漁
俠客江戸屋半次

三人ながつぎ
まぐ釣めく
月子の
宝れ
ろろうえ
おろせば海の
かりもの
ハ家清大まぐまぐ
判抜くるわ揃の
き小原山の中央へ
ありうけうるるるゆむちあそ
のりあるハ俠客石井山之助
次へ

つぎき　四方と
流波さんまろすゆ
人うげさくふさえ
ざまい
湯
屋

山の供
岩と刺
石碑のもと
ふるとびめ

▲今よひ出来果し状
きゝあふ返ゆいこせど
屈ひまどにゆよせそよも
出張いくすまーとあま
ごしふあひきやられより
ふく寄りしとへ油断ゆう
ーとるのくるびー「石井氏
ゆへ約定ゝぐ出やう
悪いえ業く
源氏の
怪へゆうされよ
さて今一度問ひ

人や来ると待受
たりへ時和四年
四月十五日の夜
夷のこく
比ろ
る海りのれた
ゆ川屋出も
るふのり氏方をさて
歸をまゆめ来るを山こい
敵どうゆ「ゆ川氏ゆ
山こ弟い先刺より
ゆこうトいまそ屋出いころに殺ゆ▲

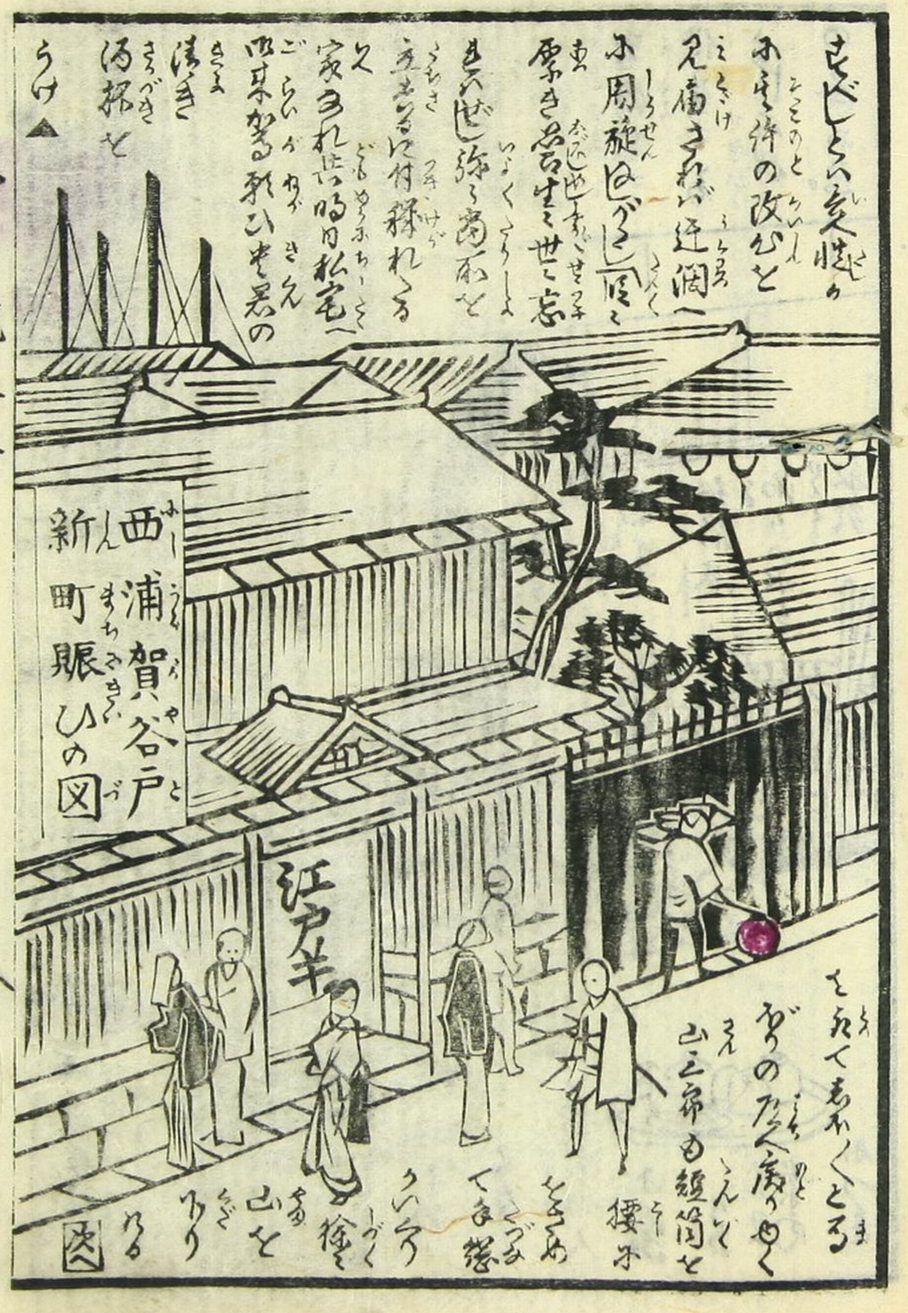
たき義あり先殺
大津の丁ふ屋
ゆそ冊紙も
妹も泊へ世
紙のころこ
屋出ふ殺
廣の義
孤尊
と夷

如何なる仔細
一件かれ

次へ

此所へ
圖書が
物語の
樣子
▼
地ふすま
我ホウ
家
▼
義氣ホ
家伏し
丑蕎麦
を
図
傳人は
浄く
堅固
とわれば
又老長の
次へ

湯殿山供養塔



西浦賀谷戸
新町賑ひの図

010190511834

北廓花盛紫　三編　切　春亭史彦作　梅堂國政画

滋賀縣美談　今常盤布施譚　三編　揃　切　松林伯圓述　梅堂國政画

雪月花三遊新話　三編　揃　切　篠田仙果錄　梅堂國政画

書物地本問屋　東京日本橋區松島町壹番地　松延堂大西　伊勢屋庄之助版

雪月花三遍対話

大尾

松延堂壽梓

三編中

A482
8

48-8149

つゞき 夫婦小臣と云我
が夫故暑出を助け給へ
改むるより暑出にあらず
明日暑出が臣さへあらば
彼様外をゆど臣てゆるの
茶碗の人者とも那が出
物がに暑出を対ゆさー
遠くるクニッに一ッへ仕遠る
了著義の不運小病
金ゆさが廣所の相屋
よりお蔡をゆ遠つを
久り今般の事件を

半

○碗の
蔡に
出
五一
の
ある
せば
悔んで
孤ら
十日の菊

湊
大福帳
金銀出入帳
當座
半

半次

か

快

半次

映

米作

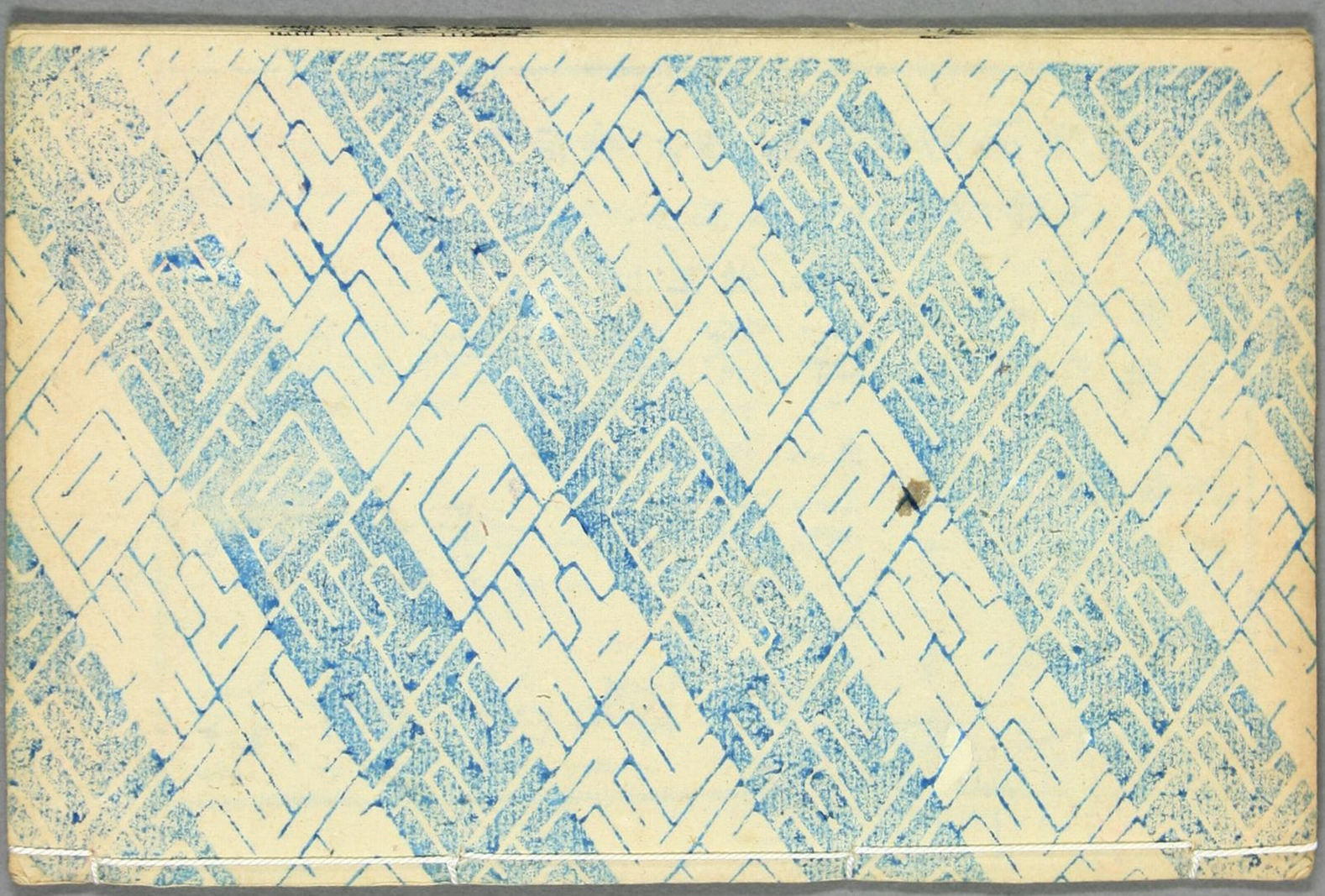
北廓花咸盛紫　三編　梅堂國政画　蘭亭東彦作

滋賀縣実談　今常盤布施譚　三編　松林伯圓綴　梅堂國政画

雪月花三遊新話　三編　篠田仙果録　梅堂國政画

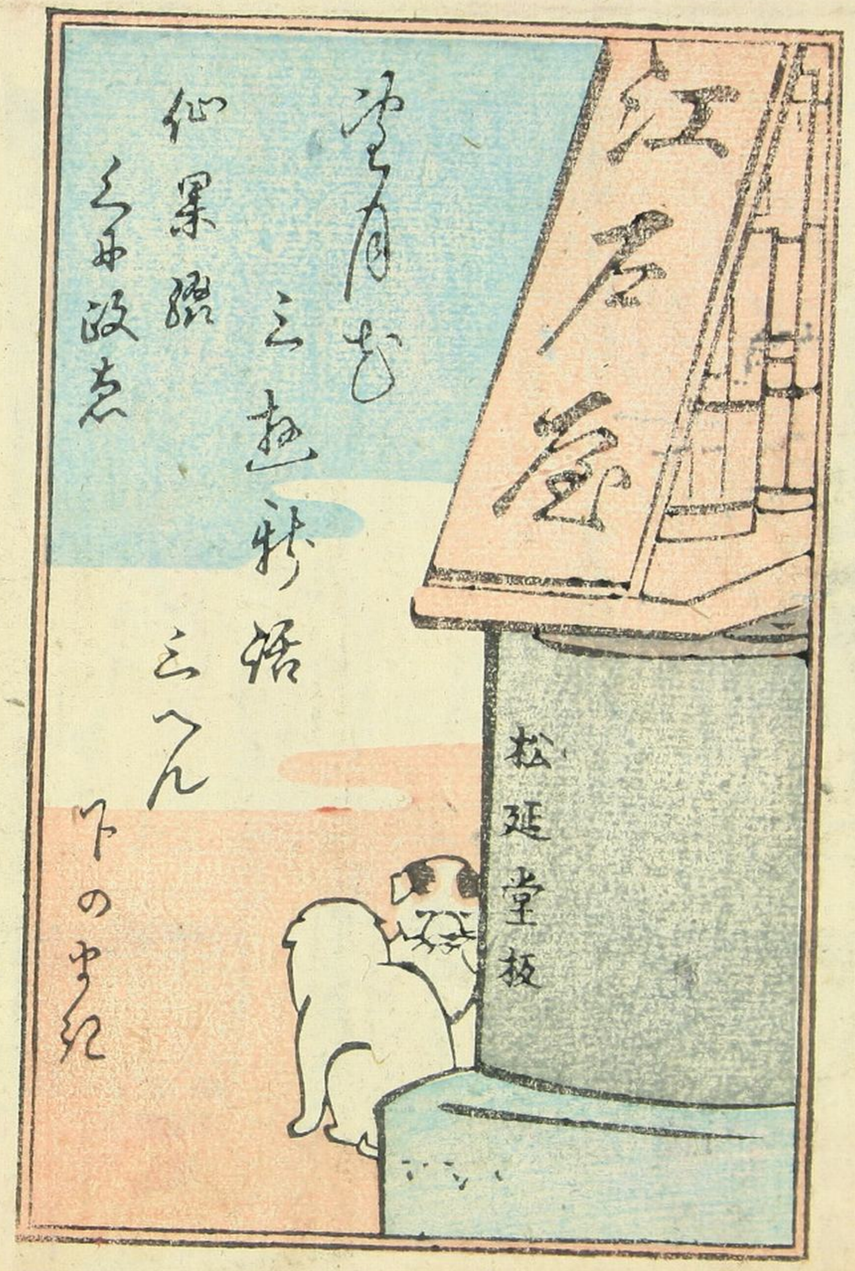
書物地本問屋　東京日本橋區松島町壹番地　松延堂大西　伊勢屋庄之助版

010190511842



竹條田仙果綴
梅堂國政画
三編下

A482
9七



48-8150

つゞき あるまいとあるべき事
うる服をのろぢく快全も
ゝうり果小ゝのめ
てまとゝ引寄れば
小ゝ口いきよく
懐中ゝう二挺
合せ一剃刀
面半一雪決
とゝ快全
の
明へ
グッと突ゝつゝ嬢姫の一命

▲あるゝまゝ可愛さ余ッゝ今者の仕義
笑悦さん世と切ゝけゝ是ゝ去ゝとゝうれて
逃出まゝ ◐

養ふのあ名ごりまゝれ快全ハ
ウンとだゝの不臭級ゝう厚壁ふ
思ひ一江戸屋の主人ゝ考ふ
ゝ考ゝ拘ゝる不灯ゝ
ゝれば小ゝ口いそのさま鬼女の如く
血の赤ゝ一刺刀逆ゝ
ゝそゝ子ゝ口ゝ子ゝ「お茶」とゝうて殺し
ゝの人ゝ殺ゝゝゝゝゝゝ
ゝ死殺の報ゝゝゝ
人達ひゝゝ云ゝ快全さんゝゝ
ゝみゝゝハッゝゝゝゝ
一死ゝの人ゝ殺一ゝゝ ▲

◐ 逃げやうさ
ゝ逃ゝ
ゝ小ゝ口ゝ
ハ行ゝ退
てゝ

つぎ　こゝの男出ゞ座敷
のぞり悪び住妻へ入下
を拔き
小原山
あて山三
のうめふ
あふ接と
ひしぐれ一ふ共
色く語り我い
色より改ん一番話ふ
ゆき偽とあり

○きび対てあるか底
ありといふに舌出ハ
あらるづき「いの
いろこに出る方た
の拘中さらん
つろことび彼
山三といる奴
色が武男ふ
ふあぞろ主人
出るい必定あり
その方て
出折ふ出ろいぐ
きんと後後

あるこの人と
殺一る
板世喜撰と
百ふ出ふ百れ出るの出も
改ん一山不ふ今宵
退ふん世ふと云滅せば
千鳥れ義出者
風丟あらげ云
ぐひ百れ云めう管ふ人
山三が勇ありとも鬼神ふ
あ[illegible]形へ鬼もあれ祇々一同カと
分せ山ふ人山三ゆの者ふ

きるく者る本へ
出きん出発
主人[illegible]
と発とト
てはそや
の者へ
懐中
ふう
多紙と
出一紙へ
浦賀の
紙地あて

つゞき

まんと惜矣うち分けの義
さゝ兄の勘当を毎ろ長さま
勘少のうちうろうろ
のめさく怒
あり人も少しい殺し
そそえ盗ミ出れどる
うさ人そ色のおるぶり
の映金ハ多あ仏性
のかう仲
る

▲番紙ハ文
るを紙ま
あ長ぶちよ

◎ちゃっと世〔巴〕と
いふ名門対ハ一切
つくぐ考んど
◎

◐うるさ
痛き沈の
竹畧山三
が分の巴
あのが響
そ初ふれば
結のの
ねくもを
しさの
ふ細ハ
トふる
が嫉妬
の怒り
ようあ
兄ま
縁
映金

◎兄の
勘当文さま
怒るとき我ま下
に高ぶる
あ〜ハ◐

次へ

つき

かねがねあなたの教さまをうけたまわり
先日当方の門かどをたびたびまたまと教
えをたまわり和歌道元生様の御
承知せいろどの方共人
まの次の所為をいかる
そうろうまたの御
迫と来しかるひ
まひを一下四郎のよう
義理都ものあ親を忘せみと
判力さろをふ切ひくまたの身を
うへ一「えをもも強ひを和ひ
女をうしあげて下せんとまはい

ふるひを羽ぶひあ多人数
かつてをるくまき屋
ある
松人
弾り
つけ
また
ハ松
の殺
と祈
をと
ふ

「つぎ」いのちもとつてやる
然しバツサリト思ひ
刀を取つては曲が枝へかゝるとの
松が枝で昔し寺せ話で
菜仏さまにてあるト情け
用捨もあらず縄ゆゑて
松へくゝりし小よの
の背を砕る
むごう打たけが
痛くは嬉しきおと之先結
生れて孰ろ髪振の涙に
月も血ぬり落き影を立て

空だへあらふ
今日から
とのしや
かあと
一生お許で
大きな安堵
と死に今私
とやこ方の
思し君と云
何の子でどう
やす「たまの

「ちかの阿女ふ兄久ら丑いのに害ねが
きし上え此昔しこの何うぞ男かし
一かいふ殺せくト泣
さみふきいの容
子を常出いへそて
清「ずいぶんへ害侍
めし此方へ来るとき元人
すび「我もおく人情知らばさんぐ
昔労き売る女をアゝま
ひどくいの身かの
根生あふ荒縁を着く
とりとめも

昇まし
浮を来ぎ邪が
ふりの実く私く
の膝で四六
と付れ御経
最中一
一糸
めに「つぎ」

礼
半次

半治

次八

御届明治十年十二月一日
神田区仲町十三番地
発行人 篠田久次郎
松島丁一番地
出版人 大西庄之助

北廓花盛紫　三編切　春亭史彦作　梅堂國政画

滋賀縣美談 今常盤布施譚　三編揃切　松林伯圓綴　梅堂國政画

雪月花三遊新話　三編揃切　篠田仙果綴　梅堂國政画

書物地本問屋　東京日本橋區松島町壱番地
松延堂大西　伊勢屋庄之助版

010190511850

八條院
仙果つぐる

雪角七之枝
彩語才三編大尾

梅堂
玉改
画

松延堂梓